NOV.2 1.19

佐伯史談

第五十一号

「郷土史研究誌」通算第七十三号

昭和四十四年四月十八日

佐伯史談会

事務所　佐伯市大字鶴望宗龍寺　羽柴方

研究

神佛合体考

史会賛助会員
本匠村　高橋智

郷土史を研究する者にとつて、色々な資料の蒐集上、神社・仏閣又はキリシタン遺跡等、その時代と宗教との関係は見逃すことの出来ない問題点であると思う。特に神社神道と仏教とは、その成立や教義を異にしていながら、昔から混合合体されて祭られている例を多く見かける。そのいわれや歴史についての考察を、仏典に関心を持つ者の立場から、浅学をも省りみず述べて見たい。

先ず日本の神々であるが、この神々はキリスト教の神とは全然おもむきを異にしている。

キリストの神は聖書に示されている通り、天主即ち天地創造の唯一神とされているのに対し、日本の神々は天地創造の神ではなく、古事記に示されている通り、大体民族の先祖を神として祭るか、又は国家に功績のあつた人、若しくはすぐれて偉かつた人の御霊を祭つていることは、既に周知の通りである。

ところが仏教は今から凡そ二五〇〇年前、インドに現れた釈迦によつて起り、中国を経て日本に伝えられて、最早や一四〇〇年有余年となつている。この二五〇〇年前は実に偉大な聖賢が、インドでは釈迦、中国では孔子、老子が相前後して現れている。

現在の仏教はその本来の目的に反し、葬儀供養や加持祈禱等の儀式的行事のみに堕している観がないでもないが、仏教とは本来、信仰によつて教えを奉じ、これを実践することによつて仏果を求めることを目的としたもので、その教義内容は何れの宗派にかゝわらず、小乗より大乗への発展と共に、豊富な知識を体系的にもりこんだ教義によつて満たされている。

そこで先ずその根本の教を説いた釈迦の生い立とその成道

本号内容

研究　神仏合体考（高橋智）……一
随想　香匠の歴史に憶う（木田長）……三
資料　佐伯藩藩政條目(四)（山田孝之丞）……五
　　寛保五人組帳（つづき）
　　御仕置五人組帳
研究　佐伯藩に於けるキリシタン史料について（真柴渉）……八
随想　軽井沢大牧頭（山本係）……一二
研究　佐伯の民はどんな働きをしてゐるか
　　(三)船頭部（市野敏仁）……一四
探訪記　竹田から高千穂の古跡をめぐる（高木赤吉）……二〇
俳句（吉田長良子）、海福寺から高畑へ、
　　集会十生、寄附拝受等……三

について簡単に記すと、釈迦は北方インド、現在のネパールの釈迦族の王子として生まれ、人間業苦の解脱を求めて、二十九才の頃王城を脱して出家し、各地に聖者を尋ね多く苦業をつづけること六年に及んだが何の得るところもなく、そこでそれまでの苦業を捨てて沐浴し、ブッダガヤの菩提樹下に端坐、冥想をこらすこと数日にして正覚を成就し、仏陀となったと云う。

然しこのさとりは微妙難解であって、これを一切衆生に説くべきかどうかについて更に思考をこらしている時、インドの最高神梵天王をはじめ護世四天王、大自在天、諸々の天部、その眷属百千万が現れ何れも目に見えない神、釈迦に対して法輪を転ぜられるよう教えを弘めること）請い、これが布教に当っては皆守護神となって協力することを誓った――と云うことが、教典や南北伝伝にひとしく記されている。

こういういわれが仏像の中にとり入れられて、如来、菩薩像の外に、明王、天部（諸天）神将等多くの像が並び祭られているが、是等は皆インドの神々であるといわれる。これがインドに於ける神仏合体の始まりである。

その仏教が中国に渡ると、ここでも中国の神々（主として道教）と合体されて祭られるようになった。私は支那事変に出征して中国各地で多くの寺院を見てまわったが、如来、菩薩像の外に、衣冠束帯をつけた神々が、実ににぎやかに祭ってあるのには全く驚いた次第である。

かくて日本には中国仏教がその伝伝来しているが、日本に於ける神仏合体については幾段階を経ており乍ら、最初から神道と仏教との確執はあまり見られない。

日本書紀の作者は、用明天皇の項に、「天皇は仏法を信じ、神道を尊ぶ」と記されているように、仏法と神道はなろび信仰されている。又六七六年国中に大旱のあった時、天皇は「使を四方に遣して幣帛を捧げて神祇に祈り、諸々の僧尼に請ふて三宝（仏・法・僧）に祈る。」と云う様に、神仏の区別なく四方に祈願している。

仏教は伝来当時より我が国固有の神々の存在を認めて、これと極力融和を図ったばかりでなく、インドの神々が守護神であったように、日本の神々も守護神としての役割を果している。

天平勝宝元年（七四九年）東大寺の造営に際しては、宇佐八幡の託宣に「神われ天つ神、国つ神をひきいいざなって必ず成し奉らん云々」と、事業完成を助けることを約束している。

最澄（伝教大師）が唐に渡る時、香炉の神宮寺の神が夢に現れて「我はこれ加春なり、代して乞ふ、和上幸に大悲の願海に沐せしめて、早く業道の苦患を救いたまえ。我はまさに求法の助けとなりて昼夜守るべし。」と告げたという。

又空海が高野山を開く時、母生明神（女神）から「妾神道にありて威福を望むこと久し。菩薩（空海のこと）この山に到る、願子（母生明神）が幸なり。願わくは私苑を献じて信情をもつてす」と云う託宣がある。

インドの仏教では、人間と神々（諸天）とは程度の差こそあれ、やはり仏によって救われるものとされている。それで仏陀のことを人天の大導師という。

日本の神々も本来仏と同じであると認められ、神々はもとより仏そのものであり、我国に出現したものであるとされ、これがいわゆる本地垂迹説である。

法華経如来寿量品に、「如是我是成仏已来甚大久遠寿命無量阿僧祇劫常住不滅」とあるように私は仏となったのは久遠の昔のことで、寿命に限りがなく永遠不滅であ

る）という言葉があり、歓迎そのものも久遠の本仏が仮の姿となって現れたものであるとされている。

観光ブームで、私もあちこち旅行して見たが、あちこちに神と仏とが同じ地域に祭られているところが実に多い。

「前は神、うしろは仏、極悪のよろづの罪を砕く石地」とお経にある、伊予石槌神社と前神寺、那智の滝で有名な熊野権現と青岸渡寺、その外例をあげると限りがないが、是等は唯単に同じ所に祭ってあるのではなくて、必ず一緒に祭られるようになった何らかのいわれがある。

平安朝から鎌倉時代にかけて、武家が立願のために神社に法華経の写本を奉納している例は多い。私達が青年の頃まではよく病気平癒の為に、氏神に千願心経をあげたものである。

このような神仏合体のあり方に対しては、昔から反対がないわけではなく、大きく表面に現れるようになったのは江戸時代中期以降で、国学が勃興したことと共に国学者、神道家、志士等によって国体の顕彰がさかんになり、仏教は異国の教えであると批難排斥する風潮がようやく強まり、それが明治維新後そのまゝ明治政府に引つがれて、神道と仏教とは一線を劃し、神道はいわば国教の位置におかれたが、仏教の保護は停止されてしまった。

然し社会通念としての昔からの寺檀関係はそのまま残って今日に至っているが、敗戦と同時に此度は神社神道に対する国家の保護は勿論、一切の宗教に対する保護は廃止されてしまった。

仏教は何宗にかゝわらず親しめば親しむ程奥が深く限りがないが、平和国家を念願する日本人は、今こそ真の仏教精神に帰るべき時ではないかと思う。

話は余談になるが、聖徳太子の十七條の憲法第一條に、「和をもって貴しとなす」とあり、現在の世相に照らして余りにも和の欠けていることを歎げかわしく思う。己の主張こそ正しいのだといううぬぼれが強すぎて、社会との適合性を考えず、正義だ、平和だといって、いがみあっている様は全く修羅道である。国際社会を見ても、中共、ソ連、米国をはじめ、中東、東南アジア各国それぞれ己の主張を固執し、国会では与党と野党、大学では大学当局と学生が、会社では経営者と労組が、家庭では親子近親者が互に対立してゆずり合いをしない、どこに和があるであろうか。

この際みんな頭をウンと冷して、和こそ社会と人間の最も正しい姿であることを考えてみたらどうだろう。神仏合体考がとりとめない結論に達して申訳ないが、何かの参考になれば幸である。

（住所　南海部郡本匠村大字三浦）

追想

番匠の歴史に憶う

本会賛助会員
大阪　木田　長

私達異郷に住む者にとって、故郷の音便りはたまらない御懐かしかりたてられるものである。私は又特別例外かも知れないが――――。

少しオーバーかも知れないが、私には自分の生まれた土地が、世界の中心の様な錯覚にとらわれ、この四十余年間変ることがない。

「番匠川」――それは本当になつかしい名称である。